
リリカルなのは-Twin Lightning- ViVid

金色の戦姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リリカルなのは―Twilight―Vivid

【Nコード】

N7076T

【作者名】

金色の戦姫

【あらすじ】

あの『ゆりかご事件』から4年。

…『聖王』と同じ魂を持つ少女は、3人の『ママ』に見守られながらすくすくと元気に育っていた。

ある日、少女は『霸王』と名乗る格闘少女と出会う。

『聖王』と『霸王』…旧き王の魂を持つ少女と、彼女達を見守る人

々の間で巻き起こる鮮烈（vivid）な物語の…もう一つの形。

聖王

あの「ゆりかご事件」から三年半が過ぎた。

事件によって受けた様々な傷も今ではすっかり癒え、関係者達の心に陰は見られない。

今日は聖王教会系列の魔法学院「Stヒルデ学院」の新学年始業式。初・中・高・大と一貫したミッションスクールの為…えっ、先刻から喋っている私は誰かって？

…慌てないで、自己紹介はちゃんとしますから。

ミッドチルダ首都・クラナガンの高級住宅地。

高給取りである時空管理局の上級士官も何人が住んでいる一等地。

その一区画に、「それ」は存在する。

「ただいま〜！」

元氣一杯なのが声でわかる少女の声。

『お帰り、ヴィヴィオ！』

そして、それに応える若い女性の声ふたつ。

ヴィヴィオと呼ばれた少女を出迎えたのは、紅い瞳が印象的な同じ顔を持つ二人の金髪美女。

「あれ、フェイトママ!？」

アリシアママも!？」

『うん♪』

そう…ヴィヴィオにとってもう一人の『ママ』、彼女と彼女のママ…高町なのは法的後見人でもある…。

フェイト・テストロッサ・ハラウンとその『姉』である私…アリシア・テストロッサ・ハラウン。

私達は…えっ、フェイトはともかくお前は死んでいるはずだろって？

そのはずだったんですけどね…詳しくは前作「Twin Lighthouse」から、読んで頂きたい。

「ママ達ね、艦^{ふね}の整備で…明後日の夕方までお休みなんだ。だから、ヴィヴィオの進級祝いしてあげようって話になってね」

オーブンから、とてもいい香りを放つ物…店で売っているようなデコレーションケーキを取り出しテーブルへと運ぶ私。

自慢じゃないが…いや十分自慢になるか、私はわりと甘いものを作るのが得意で洋菓子店兼喫茶店「翠屋」の娘である…なのはに比肩する腕前だと、仲間内からよく言われる。

「そっかー!」

ありがとう、アリシアママ！
フェイトママ！」

『どういたしまして♪』

程無くなのはも帰ってきてこの「一人娘と3人の母」という、端から見たら奇妙極まりない四大家族の団欒が始まるのだった。

「…ごちそうさま！」

さて、今日も軽く練習しておこうかな」

「あつ、ヴィヴィオ！
ちょっと待って！」

立とうとするヴィヴィオを呼び止めるのは。

「ヴィヴィオももう四年生…十歳だね？
基礎固めも大分できてきたから、そろそろデバイスを持たせてもいいんじゃないかってアリシアママと相談してたところなの」

「…ほんと!？」

ヴィヴィオの目が輝く。

「実は今日、本局でマリーさんから受け取ってきてたのです」

そう言って、少し大きめの箱を取り出しヴィヴィオに渡すフェイト。

「…うさぎ？」

ヴィヴィオが箱を開けると中に入っていたのはウサギの縫いぐるみ風デバイス。

「あ、そのウサギは外装というかアクセサリーね。中のデバイスコアは普通のクリスタルタイプだよ」

私の概説？に合わせ箱から出てくる『ウサギ』。

「うわ！？」

と…ととと、翔んだよ！？
動いたよっ！？」

予想通りのリアクションをとるヴィヴィオ。

「それはおまけ機能だってマリーさんが。
：色々とりサーチもして、ヴィヴィオに合わせた特別仕様。
名前もまだないからつけてあげてって」

「エヘヘ…実は名前も愛称も、もう既に決まっていたりして。
そうだ、アリシアママ！」

リサーチ済みってことは…もしかして『アレ』って、できる!?!？」

「…勿論できるよ。
セットアップしてみて」

『アレ』というのは…漫画「ViViD」を読んだ方ならわかるだろう。

夜、庭で『マスター認証』を行うヴィヴィオ。

「…私のデバイスに、固有識別名称を登録。
マスコットネーム
愛称は『クリス』。

正式名称『セイクリッド・ハート』…。」

母・なのはの『不屈の魂』（レイジングハート）と対を為す『聖なる魂』という意の名。

「いくよ…クリス！

…セイクリッド・ハート、セーット・アープ！！」

光に包まれて『変身』していくヴィヴィオ。

その姿に、仰天してしまうフェイト。

『…あっ！』

私となのはは、大事な事を忘れていた為に声をあげてしまう。

「姉さん、なのは…！

ヴィヴィオが、ヴィヴィオがああ…！！

…何で聖王モードに！？」

涙目でパニックを起こしているフェイト。

「ちょ…ママ達！？

なんでフェイトママに説明してないのー！？」

「いや、それはその…ついうっかりって奴でして」

慌てて弁解する私。

「うっかりってー!!」

一方その頃、クラナガンの北にあるベルカ自治領。

『聖王教会』の本部があるこの地に、ひとつの事件が報告されていた。

「…今回の件は『彼女』に協力して頂いた方が、確実性が増すと思うのですが…貴女はどうお考えでしょうか？」

モニターの向こう側にいる銀髪の少女と話している、金髪の女性。

聖王教会・教会騎士団騎士カリム・グラシア。

四年前の本局襲撃・半壊を『能力』によって『予言』していた。

結果として防げなかったが最終的にその関係者の多くを味方に引き入れることができた。

『…彼女に出張ってもらう迄ありません。

彼女では強すぎますから…D S A A公式大会7連覇は伊達ではないかと。

私と妹達がそれとなく事を運びます』

少女―チンク・ナカジマが「対策」を提案する。

私となのは・ヴィヴィオは家の近くの公園にいた。

因みにフェイトは留守番。

あの後、何とか「説明」を終えてフェイトが落ち着き『大人モードはヴィヴィオの魔法が影響している』という結論で納得した。

私はなのはやヴィヴィオと別のコースを散歩していた途中、殺氣を感じた。

「…誰!？」

隠れてないで、出てきたらどうなの!」

それに応えたのは、とても澄み渡った綺麗な声。

「…流石ですね。

管理局随一の『使い手』と言われる貴女に、小細工は通じませんか」

18歳くらいと思われる、碧銀の髪の少女。

「お初にお目に掛かりますアリシア・テストロッサ・ハラオウン空将閣下。

私、^{わたくし}カイザーアーツ正統…。

ハイディ・アインハルト・ストラトス・イングヴァルトと申します。

――『覇王』を名乗らせて頂いています」

「『カイザーアーツ』!？」

『覇王』!？」

何を言ってるの…まさか、貴女が例の連続襲撃犯!？」

最近クラナガンは格闘技で名のあるアスリート達が、何者かに襲撃されるといふ事件が発生している。

「理解が早く助かります。

噂に名高い『女帝』の力、確かさせて頂きます」

言うなり、彼女はそのまま殴りかかってきた。

「…くっ!!」

かろうじてアインハルトの一撃を捌き、彼女を止めるべく「説得」を試みる。

闘いは互いに相手の出方を伺いつつ単発を繰り返す、牽制しあった状態。

「くっ…流石ですね。

公式大会7連覇の実力は、伊達ではない…という事でしょうか」

「…どうして、こんな事をするの!？」

「…私の目的は列強の王達を総て倒し、ベルカの天地に覇を為す事。
…その為に、貴女のような『最強』と言われる方々と闘うのです」

「…光栄ではあるけど私はそんな称号興味はない！
欲しければいくらでも公式の試合で奪えばいい！

…それに、貴女が言ってるベルカの戦乱は…」

互いの間合いが、少しずつ詰まっていくな。

「もう遠い過去に終わっているの…！」

私が6歳の時から、17年続けている徒手格闘競技・ストライクアーツ。

ヴィヴィオや彼女の学友も学んでいる、ミッドで最も競技人口の多い競技。

「…終わってないんです」

「えっ…きゃあっ!？」

渾身の一撃を放った…はずだったが完璧に受けられ、強力なカウンターを食らい倒されてしまった。

ここで、どうして私が件の連続襲撃犯に襲われたか…その理由を説明したい。

詳しくは前作の「リリカルなのは—Twin Lightning—」にもあるが、私は18年前とある家族の元で暮らしていた。

その時に私の「姉」が徒手格闘競技ストライクアーツを学んでおり、

その影響もあって私も今まで17年間続けている。

その時の家族はもう居ないが今はフェイトの『姉』として、彼女にとっても養母である本局提督リンディ・ハラオウンの『娘』となり義兄クロノやその妻で戦友でもあるエイミィらと概ね平和で楽しい日々を過ごしている。

そして、どうして襲われたかというところ私は12歳〜18歳の7年間、公式大会で素晴らしい成績をあげている。

『DSAインターミドルチャンピオンシップ』。

全管理世界から、魔導師が集う公式競技大会。

私は5年前、このインターミドル・エリートクラスで史上初の7連覇を達成してしまった。

それからというもの、常にその偉業？を持ち出されるのだ。

翌朝、ナカジマ家。

「…う…んっ…」

「…あ、気がつかれましたか！」

「…スバル？」

あれ、私どうして…」

「覚えてないっすか？」

件の、連続障害事件に遭遇したんすよ」

「…ノーヴェ？」

じゃあ、貴女が…捕まえたの？」

あの後気絶した私を発見しアインハルトと一戦交え、彼女共々私を連れて帰ってきたのは…かつて、敵同士であった『ナンバーズ』の9番ノーヴェ・ナカジマであった。

「…いや、まあ…。」

捕まえたかっというと微妙かも知れないですね」

スバルが犯人の私物らしきバッグを持ってくる。

「駅のコインロッカーに、荷物置いてました。

…名前は、アインハルト・ストラトス。

Stヒルデ学院の中等部に通ってます」

荷物の中の学生証の名前を読み上げるスバル。

私達はアインハルトが目を醒ますのを待って、事情を聞く事にしたのだった。

アインハルトに例の事件を起こした理由を聞いた私達は、二度と同じ事をしないと約束できるのなら事件にしないようにしてもらおうと約束した。

「ノーヴェ、少しいい？」

アインハルトの追い求める『強さ』って…」

「多分、空将^{あなた}殿の考えられる通りすよ。

まだ確信は持てませんけど…ね」

あ、やっぱり。

『アスリート（競技者）としての強さ』って事か…。

こうして通称『霸王事件』は幕を閉じた。

しかしこの時の『聖王』と『霸王』の出会いが、後に彼女達の将来に大きく影響していく事になるのはまだ誰にも…私にも解らないのだった。

合宿

『霸王事件』から数日後、私の携帯端末に意外な人物から連絡が入った。

「…はい」

『…ハラオウンさん、ですよね？』

「あれ、アインハルト？」

どうしたの…あれっ、この番号教えたっけ？」

『ノーヴェさんからお聞きしまして。

貴女が、極めて優秀な戦闘魔導師である事も』

「あー…。

まあ、一応空戦ランクなら最高のSSS+を取ってはいるんだけどね。

あくまで魔力ランクだから強さに直結してるっていう訳じゃないし、やり方次第で幾らでも勝機は出てくるものだよ」

『…それでも私は、貴女と手合わせしたいです。

武術も、かなりの手練れでいらっしゃるとお聞きしたものですから』

「うーん…それじゃ、こういうのはどうかな？

来月…GWって予定入っているかな？

なければ私と一緒に旅行に行こう。

今年のStヒルデって土日と併せて試験休みで4連休取ってるでしょ？

私の知り合いにある世界でペンションをやってる人がいて、今年もトレーニングを兼ねて遊びに行くの。

きつと損はさせないから、是非参加して欲しいな。

それに…貴女にとって大切な人も参加するから来ないと絶対後悔する、それだけは確実に言えるよ」

アインハルトは、私からの「提案」に少し思案したが結局参加を決めた。

ノーヴェも私と同じように誘ったのが決め手らしい。

そして5月1日、初等科・中等科ともに試験の結果が返ってくる日だ。

「さて、3人とも…試験の結果はどうだった？」

なのはがヴィヴィオとその親友二人、リオとコロナに出来を尋ねる。

「花丸評価頂きました！」

「3人揃って…」

「優等生ですっ！」

順番にリオ・ヴィヴィオ・コロナ。

「…お見事、これで堂々と遊びに行けるね」

その一時間後、私の端末にアインハルトからの連絡が入った。

結果は：494点で、学年トップだそうだ。

大人しいイメージ通り文武両道だったか。

アインハルトは明日の朝、ノーヴェが連れて来る事になっている。

この半月でヴィヴィオともそれなりに、仲良くなれたようだし…お互いに、いい思い出をたくさんつくって欲しいと切に願う。

5月2日。

第97管理外世界「地球」：特になのはの故郷である日本では、春の大型連休の最中である。

ミッドチルダ系管理世界にもそういう風習は存在しているので、今日から最大で4日間の連休となっている所が多い。

えっ、私達もかって…私達管理局員組は有給も使って4日休みにしたの。

まあ、そんな訳で出発時刻が迫る時待ち合わせていた相手が到着。

「お待たせしました…。

アインハルト・ストラトス参りました」

「え、ええ!？」

アインハルトさん!？」

ヴィヴィオが、かなり仰天している。

「…この度は、合宿旅行にお誘い頂きまして…本当にありがとうございます。ございます。

…お邪魔でなければ、私もご一緒させて頂きたく思うのですが…」

ヴィヴィオの答えは、最初から決まっていた。

「はいっ、是非!!」

もー全力で大歓迎です!!」

そして、次元港でスバルやティアナ達と合流して合宿場所である観光用無人世界カルナージへ向かう。

あの母娘、変わっていないかな…?

無人世界・カルナージ。

ミッドチルダから次元船で4時間の場所にある観光用世界で、年間を通し温暖な気候と豊かな自然の美しい場所である。

この地に3年前から管理局と聖王教会の庇護下の元、ペンションを経営している母娘がいる。

「…ママ、皆が来るのってもうすぐだよね?」

『娘』が『母』に、確認をとる。

「…あら、本当だわ。

お出迎えしてあげなきゃ、ね…。

今年は12人って事だから相当忙しくなるわね」

程なく、この場所に団体の客がやって来た。

「こんにちは〜！」

「お世話になります！」

「いらっしゃい！」

…この地にあるペンション『アルピーノ』は超一流の高級ホテルにも全く劣らぬ大人気の場所。

なら何故、私達はたやすく予約が取れるのかと言うと縁深い知人が経営しているから。

3年前、管理局本部がテロにあった一連の事件に娘・ルーテシアの方が関わっていたのだ。

それから、紆余曲折を経てルーテシアは特赦となり…行方不明だった母メガーヌと共に、このカルナージでペンションを経営しながら静かに暮らしている。

「みんな、今年も楽しんでいてね！」

『はーい！！』

こうして、トレーニング・ツアーはその幕を開けたのだった。

今回は、2日目と3日目にフィールドマッチと称した紅白戦をやる予定。

初日は、アスレティック・レクリエーションと称して基礎トレを中心に行う。

最終日は完全に遊びだが、各々鍛練を意識しつつ遊ぶことを念頭におき行動するように言っている。

ちなみに私は、紅白戦には出ない…なぜかと言うと、一種のバランスブレイカーだから。

なのはやフェイトですら、魔導師ランクは私より下の空戦SS。

そりゃ、まあ…あの二人を同時に相手すれば相当苦戦するけど…。

「はあ、はあ…。

相変わ…らず…なのはの…教導…メニューは…厳し…いな…あ…。
そんな…時間…なかった…はず…なのに…それぞれ…に、あった…
メニューを…用意…してるん…だもの…エース…オブ…エースは…
伊達じゃ…ないって…事…なのか…な…？」

なのはが事前に組んでいたらしい、トレーニング用のメニューに従いフィールドトレーニングを行う私。

『トップエース用の、特別メニューだよ♪』…なんて満面の笑顔で

言われたら、文句言えないじゃない。

…昔、ヴィータがなのはに『悪魔めっ…!』とまるでどこかのギャブル漫画のように毒づいた事があったけど、今まさに私も…同じように言わせて貰うよ。

(ざわ…) 悪魔めっ…!!

それでも何とかメニューをこなし、休憩に入る。

フェイトやティアナらは、口では大丈夫と言いながらすでにバテている。

何だかんだで初日があっという間に終わり、お風呂の時間となった。

ペンションアルピーノには『適当に掘ったら出た』という天然温泉がある。

「あれ、アリシアさん？」

アリシアさんも、これからお風呂ですか？」

私に声をかけてきたのは、ヴィヴィオの友達のコロナだった。

「うん、みんなもこれから入るの？」

じゃあ、お姉さんも一緒に入っていいいかな？」

『どうぞどうぞ』

ヴィヴィオ達年少組と私とキャロとルーテシアの6人で、ペンションアルピーノ自慢の露天温泉に入る。

「…はあ…。」

風呂はいいねえ…身も心も潤してくれる。

人類の産み出した、文化の極みだね。

皆もそう思わない？」

思わず、誰かが言いそうなセリフを口走ってしまった私。

「えーっと…ママ？」

虹彩の色が緋だからって、それは色々和不味いんじゃないの？」

よりによってヴィヴィオにツッコまれた…うーむ。

その時、泉質が異なる隣の露天から悲鳴が。

そちらはなのは達年長組とアインハルトがいる。

刹那、隣から巨大な水柱が上がった。

どうやら、アインハルトが『手刀水斬り』に成功したらしい。

突如温泉に出た『何か』はこちらにも来た。

「ひゃう!？」

「はわわっ!？」

「きゃんっ!!」

順にキャロ・ヴィヴィオ・コロナ。

うーむ、こんな事を動物がするとは思えにくいしな…どこぞの温泉ガメならまだ可能性は…って、そうじゃなくて。

そんな事を考えていると、不意に私の体に妙な感触が伝わった。

「!？」

胸と、通称『大事な所』を立て続けに触られて…変な声をあげてしまった、私であった…。

「あふ…んっ!

くっ…逃げられた!」

こんな事ができる存在を、私は知っている。

そうこうしているうちに、乱入した『それ』はリオに襲いかかる。

「がおーっ!!」

「!!」

しかし次の瞬間に『相棒』ソルフエージュが起動してBJを展開、強烈な足技・絶招炎雷砲により侵入者を撃退したのだった。

「…やっぱり、貴女だったのね…。

どういうつもりだったのかじっくりと聞かせてもらいましょうか…。
ねえ、聖王教会総本部の…シスター・セイン…?」

ペンション・アルピーノ、宿泊者用母屋。

その後、リオと私によって捕まったのは…聖王教会の本部でシスターをしている元『ナンバーズ』の6番・セインだった。

彼女は『戦闘機人』というインプラントサイボーグの1人で、壁などの無機物に潜行・透過できる特殊能力『ディープダイバー』で、熔岩等を除いてどんな場所でも隠れられるのだ。

『ナンバーズ』と呼ばれた12人の少女達やスバル・ギンガは、こういう常人には持ち得ない力を持っている。

「あ、あのう…ハラオウン閣下?

凄く顔怖いッス…」

「当然でしょ、貴女自分が何やったか…ちゃんと理解してるの!?!
もし誰か怪我でもしたら、大事になったの…本当に判ってる!?!」

そこヘルーテシアが乗ってくる。

「私が営業妨害で訴えたら捕まるしねえ…?」

セインは半泣きで、駄々をこね始める…まあ大人しく説教されるよ
うなら、最初からこんな事はしていない…はずだ。

「…何だよ！
折角来たのに、あたしだけとんぼ返りなんて…つまないじゃんか
よっ！！」

結局、ルーテシアが恩情を見せ『今回の合宿で台所を手伝うなら』
といい彼女を許したのだった。

2日目。

赤青2チームに分かれてのフィールドマッチ。

前方から赤はヴィヴィオ・スバル・コロナ・エリオ・なのは・キャ
ロ。

青はノーヴェ・フェイト・アインハルト・ティアナ・リオ・ルーテ
シア。

私とメガーヌは勝負の行方を映像で見守る。

緒戦は伯仲した展開を見せ紙一重でティアナの切り札『スターライ
トブレイカーファントムストライク』が炸裂、赤組全員を戦闘不能
にして勝利した。

「あ…危なかった…！！
タッチの差でなのはさんに決められる所だった…」

青組で残ったのはティアナとアインハルトの2人だけだった。

因みにエリオがフェイトとマッチアップし、ソニックを展開した隙

をついて強襲をかけてBJもろとも撃破した。

つまり、フェイトの柔肌…白い裸体を不可抗力ながら晒させてしまった、というわけだ。

無論後で彼が、フェイトに半泣きで怒られていたのは言うまでもない。

休憩を挟みつつ、チームの編成を変えてこの日は更にもう2戦行っ
た。

各々改善点が見つかって、それを元として更にレベルアップを図る。

「あの、アリシアさん。

少し…私のお願いを聞いて頂けますか？」

夕方、神妙な面持ちで私の元に來たアインハルト。

「…『私と、手合わせしてください』かな？」

私は構わないけど、今日は疲れてるだろうからよした方がいいと思うな。

明日朝一なら万全の状態で臨めるんじゃない？」

その言葉にアインハルトは少しだけがっかりした顔を見せた。

少し可哀想だったので明日朝一で、必ず手合わせしてあげるからと約束した。

3日目。

「…久し振りに、アリシア隊長の『全力全開』を目の当たりにできるわね。

アインハルト、トラウマになんないけど」

ルーテシアが軽口を叩き、スバルとティアナが苦笑いする。

ヴィヴィオ達全員が見守る中私とアインハルトの真剣勝負が始まる。

因みに私のBJは、動きを妨げないよう体にしっかりフィットした半袖・パンツルック。

白を基調とし縁取りを青で彩っているため、スバルのBJインナーの色違い…と言えなくもない。

「さて…始める前に何か、聞きたい事はない？」

「…格闘技は何年ほど経験されているのですか？」

「あれ、言って…無かったよね。

ほぼ独学だけど、6歳の時から17年…かな」

「17年も…もう、皆伝と言っていい程ですね。
ですが、私もそう易々とは負けません」

『じゃあ2人共、正々堂々全力全開でね』

モニター越しに、なのはが私達へ合図を送る。

『レディ…GO!!』

私とアインハルトの本気の勝負が始まった。

「霸王流・断空拳ッ!!」

先に仕掛けたのは、アインハルト。

私はそれを受け流し反撃をかける。

「咬龍連牙弾!!」

素早い蹴りの6連撃・咬龍連牙弾。

アインハルトはかろうじて防ぎ、間合いをとる。

「く…やはり一撃がとてつもなく重い…。
ならば、これで!」

おもむろに、構えを解いたアインハルト。

嫌な予感がしつつも、私は次の一手に入る。

「来ないの…?
なら…今度は、こっちから行くよ!」

大地を蹴りアインハルトに迫る私。

「閃雷掌！」

掌から凝縮した電撃属性の衝撃波を撃ち出す技。

しかしアインハルトはこの一撃を…。

「…霸王流・旋衝破！！」

…『そっくりそのまま私に投げ返した』。

フィールドマッチでもこの技を見せていたので、全く警戒していなかったという訳ではないが…。

まさかこれも返してくると思ってはいなかったので、ノーガードで喰らった。

「きゃあああっ！！」

…く、やられたな…迂闊に魔力弾は撃てないか」

試合は一進一退。

だが…そろそろ、お互いに決めたいと思い始める。

アインハルトの僅かな隙を突いて、私は彼女の動きを止める。

「…はあああっ！！」

これが私の…拳での、全力全開ッ!!
天翔…閃龍陣ッッ!!」

四肢に雷を纏わせ、怒濤の連撃を浴びせる…私独自の『秘奥義』。

「くっ…ああっ!!」

まともに喰らって、倒れるアインハルト。

『…そこまで!』

この勝負アリシアちゃんの勝ちです!!」

なのはが高らかに『宣言』する。

「ふうっ、際どかったな…もっとも私は、格闘よりも剣技の方が得意だしね」

「…完敗です、今の私ではどう足掻いても勝てる気がしません…」

「そんな事はないよ。

貴女はまだ『原石』だから私だって越えられる…。
実際紙一重だったしね」

こうして、辛うじて勝利を納めた私なのだった。

「…ヴィヴィオさん」

最終日、ヴィヴィオの元を訪ねたアインハルト。

「…素敵なお母様が3人もいらっしやって、ちょっと羨ましい。
いつかあの方達とじっくりお話したいですね」

「…はい？」

色々な事があった4日間も終わり、皆日常へと帰っていく。

『聖王』と『霸王』の魂を継ぐ少女達と、その周りにいる人々の間で起こる鮮烈(vivid)な物語は…まだ、始まったばかり。

番外『変わりゆくもの、変わらないもの』(前書き)

この話は本編とは全く関係ありません。

唐突に思い立って書いた、私の気まぐれです。

なのでこれの展開が本編に影響を及ぼす事は無い…と思います。

番外『変わりゆくもの、変わらないもの』

「ここは…」

草原に立つ大木の下で目を覚ました私。

どこか見覚えのある風景が広がっている。

私は起き上がり、それほど遠くない距離に見える街に向かって歩き出した。

ミッドより少しだけ遅れた文明レベル。

見事に自然と調和しながら栄えている町並み。

私は自分の記憶の海に潜り必要な情報を引き出す。

「…そうか、ここは…」

記憶の欠片を見つけた私はこれから起こる『出来事』に思いを馳せ：
それを振り払うように、頭を左右へと激しく振った。

そして、私は再び目的地へ力強く歩を進める。

永らく私と共にあり、最早私の一部となった『相棒』と一緒に。

たとえ導き出される結果が変わらなくとも。

今なお私の心に突き刺さる棘を、抜き取るために。

そして、おそらく時間的な余裕はない。

私は、踏み出す足を次第に早めていく。

手遅れになつては、意味がないのだから…。

街の外れにある廃倉庫。

ここに20歳前後の男性と13〜4歳といった感じの少女がいた。

男性はローブのような服に拳銃のようなものを持ち、少女は水着のような上着に外套を合わせた服装。

さらには、騎士を思わせる剣のような武器を持つ。

「ここか…」

男性が呟く。

「…はい。」

『例の反応』は、この倉庫から出てます。
まず、ビンゴでしょう」

少女が返す。

どうやら会話の内容から、逃げ込んだ犯罪者を追っている捜査官と思われる。

二人は倉庫を見つめていたが、同時に頷いて倉庫へと駆け出す。

そして…。

「（…私の記憶通りなら、もう始まつてゐるはず。

お願い、早まった事だけはしないで…後々後悔しないためにも）」

私は目的地を目指し市街をひた走る。

『事件』が起きる倉庫へと向かつて…。

「…動かないで！！

時空管理局です、ただちに武装を解除しなさい！！

従わない場合、敵対の意思ありとして…あなたを拘束します！！」

少女が、先程とは全く違う凛とした口調で『相手』に勧告する。

「抵抗は無意味だ！！」

男性が勧告するが、相手の男は口の端を歪める。

「ククク…フハハハ…。

『抵抗は無意味』か。

果たしてそうかな？」

刹那、男が放った衝撃波が2人に襲いかかる。

少女が男性を庇って、防御手段である『障壁』を展開させる。

衝撃波は防ぎきるも、その隙について接近されている事に気づかない。

「骨まで碎けろお!!」

『!?!?』

少女の構える『剣』を弾き飛ばし、その衝撃で少女の軽い体がいとも容易く飛ばされた。

「きゃあああっ!!」

少女は倉庫の隅に置かれていた、段ボール箱の山まで吹っ飛んで激突。

「二佐!!」

このお…っ!!」

男性は拳銃を男に向かって発砲する。

撃つのは実弾ではなく生命エネルギーを利用した戦闘技術『魔法』で作った弾丸である。

『二佐』と呼ばれた少女はすぐさま段ボールの山から飛び出し、男に猛然と斬りかかる。

「いいぞ…今の俺は非常に紳士的だ。
楽うゝに殺してやる…」

二人の背筋に、おぞましいほどの寒気が走る。

やっこの思いで私は目的の廃倉庫へ辿り着いた。

私は『相棒』を起こして、戦闘の準備を整える。

中に入った私が、目にしたものは…。

「ふん、つまらん…。

まあ、少しは楽しめたから良しとするか…。」

…私と同じ金髪の少女が、狂った笑いを浮かべる男に足蹴にされている瞬間。

「その子から離れろ!!」

私は反射的に、男へ叫んでいた。

「ほう…増援か、貴様は…このガキの身内か？」

私は怒りを極力抑えて男に答えた。

「…身内？」

違うな…だが大事だという事には変わりない！

それよりも私に二人を回復させる…代わりに、お前の相手は私がしてやる!!」

男はかなり侮った顔で私を見やる。

「…貴様がか？」

ふん、それも一興か。

貴様は：俺の乾きを癒せるのか？」

私は男を睨んだまま。

「：愚問だ！」

「ならいい、貴様の好きにするんだな」

男は少女から数歩下がり、倉庫の中央に。

私は急いで2人に治療術をかける。

少女の傷は浅く、傷はすぐ消えたが：男性の方は傷がひどくとおきの秘術を用いてもダメだった。

：やはり『悲劇』は、どうあっても回避不可か：さあどうする？

もし未来が変わって、彼が生きていたなんて事にでもなったらどれほどの惨事になるか：。

：いや、むしろそれは喜ぶべきことか。

うまくいけば、男性を説得して、彼の『妹』とともに早めに味方へ引き入れられるかもしれない：。

そんな事を考えてる間にも術をかける手を止める事はない。

何故なら僅かだが男性にも息があったから。

「：忌まわしき力に敗れし者に、再び立ち上がる力を分け与えん。

：『レイズデッド』」

『湖の騎士』を名乗る女性と、自分の『妹』が保護をしている『竜使い』の少女から以前教わった秘術。

先程と違う『治療の秘術』をかけ、何とか一命を取り止めさせた。

私は二人を倉庫の外へ移動させ、安全のため展開した強力な隔離結界で護る。

私が戻ると、あの男は退屈そうに私を待っていた。

「準備が済んだようだな…覚悟はできたか？」

男の言う『覚悟』とはあの少女が、答えられなかったこと。

「…俺に、殺される覚悟がなああああ！！！」

私は男の狂気に、絶大なる『気迫』で応える。

「…それは私のセリフだ…貴様だけは何があらうと、ここで私が引導を渡す。

イレギュラー
異分子は私一人で充分だ…！！！」

私は再び男を睨みつけて、自慢の『相棒』を正面へと構える。

「フン…ならば『死合う』とするか。

先に言っておくが…たとえ女でも、力のある奴に俺は手心など一切加えん。

そのつもりで…来い！！！」

「…第一級広域次元犯罪者バルバトス・ゲーティア、貴様を…駆逐するっ！！！」

その言葉と共に、私は男…バルバトスに斬りかかっていった。

何合か打ち合い、間合いを一度離す。

「…ふうつ。

さすがに一撃一撃がとてつもなく重いな…」

「所詮、女の細腕ではこの程度が限界か。

興が削がれた…せめてもの情けだ、一瞬で貴様を冥府へ送ってやる…」

得物…巨大な斧を眼前へと突き出すバルバトス。

「…魂まで砕けろ、ジェノサイドブレイバー!!!!!!」

『轟ッ!!』と音を立てて、私に襲いかかる衝撃波。

恐らくこの技で、腕のたつ者達を…数多く蹴散らしてきたのだろう。

だが…甘いッ!!

「――真名解放。

インストール具現化・『清廉なる百合の姫騎士』（セイバー・リリイ）」

「All right, my master.
mode “liry” set up」

『親友』の『不屈の闘志』の如き流暢な英語で、私の『命令』に応える相棒。

『最強の姫騎士』の、別の姿を象徴するジャケットを纏う私。

『ギイン…ッ！！』

その副次効果…『圧倒的な技量と護りの力』を得て、私は苦もなくバルバトスの技を防ぐ。

「何…ッ！？」

巻き上げられた埃が晴れ、バルバトスは目を疑う。

何事も無かったかのように平然と立つ私に。

纏っている私の雰囲気、明らかに違う事に。

「この程度か…？」

ならば悔やめ、時空を渡り多くの命を手にかけて己の大罪を！

『神に近い』力を持つ者の逆鱗に触れた事を！

貴様の居場所は、あまねく時空の外…『次元の牢獄』なのだから！
「！」

そう言い放ち、私はまたもバルバトスへ斬りかかっていった…。

「魔神剣・雷牙！」

「ぬう…っ！」

地を這う剣圧を当て。

「雷迅剣！」

「ぐおっ!？」

強烈な突きで、相手を仰け反らせ。

「ちりれんげ散蓮華・しんらい神雷!!」

「ぬおおっ…!!」

雷を纏わせた、突きの雨を浴びせ。

「真空裂衝刃!!」

「ぐ…っ!!」

特大の真空波を当てて。

「…さあ、いい感じに体も暖まったしそろそろ終幕としよう。
己が罪科、その身で充分に思い知れッ!!」

手に持っている『得物』の剣を巨大化させる。

「これが私の『約束されし勝利の剣』だ…!
…雷刃!」

刃に力…魔力を流し込み。

「…滅殺ッ!!」

大きく振りかぶって。

「…極光斬ッ…!!」

剣を振ると同時に、溜めた魔力エネルギーを解放して攻撃する。

光と爆煙が周囲を覆う中、私は元の姿に戻る。

爆煙が晴れ、バルバトスはどこにもいなかった。

結界を解き、戦う前に戻る倉庫内。

不意に私の脳内にあの声が響く。

『フハハ…！』

なかなかいい戦いだった…またいずれ相見える日を、楽しみにしているぞ。

アリシア・テスタロッサ・ハラオウンよ…』

『ま、待て…っ！…！』

魔力探知でもバルバトスを追う事はできなかった。

胸騒ぎを感じながら、私は二人のところに戻った。

意識を取り戻した少女は、自分達を助けに来てくれた女性剣士に…目を奪われていた。

あたかも『相手の繰り出す技を全て知っている』かのような、嘲笑うかのように華麗な戦いぶりに。

そして何より、彼女が戦う美しい姿に。

自分と同じ金髪と緋い眸、白金に輝く鎧に似たバリアジャケットを

纏った女性の凄まじいまでの強さに。

少女の心に英霊と同化した女性剣士の圧倒的な強さが印象付けられた…。

戦いを終えた女性剣士が、少女の方に歩み寄る。

「あ、あの…っ！

ありがとうございます、私達では殺されていたかもしれませんが…いえ、間違いなくそうなっていました」

少女…『過去の私』が私に礼を言う。

「気にしないで…それより立って歩けるなら、怪我は大丈夫だね。そっちの人はすぐに治療を受けさせないと」

「…そうですね。

でも、その前に…あなたのお名前と所属をお聞きしていいですか？」

その時、私の体が淡い光に包まれる。

「あっ…もう時間か。

仕方ないな、名前だけなら教えてあげる。

私の名前は…『アリス』、アリス・インテグラ」

「えっ…！？」

少女の顔が驚愕に彩られ、私は光の中に消える。

「嘘…でしょ…？」

どういう事だろう…？

『アリス・インテグラ』は『私の』名前…。
まさか、あの人は…」

少女は答えに辿り着く。

「未来の…私…？」

『…おはようございます、マスター。
今日は随分と遅いお目覚めですね？』

15年以上連れ添った私の『相棒』アルテミシア。

愛称は『アルティ』または『アル』。

なのは達の故郷・地球の、実在したらしい女王の名というのは後で知った。

…いや、連れ添ったという言い方は不適切かな？

デバイスには珍しく、気がよく回るというか…お節介焼きというか。

「ふぁ…あぁ…っ。

アル、今何時？」

私は欠伸を噛み殺さずに、起き上がりの伸びをひとつする。

『9時43分です。

私がマスターにお仕えるようになってから、休日の朝では2番目に遅い起床となりますね。

10時間ほど眠られていた計算になります』

「…そういう事はいちいち言わなくていいし、覚えてなくて結構」

…と、ジョークを言う事ができるほどに高性能。

戦闘でも彼女のサポートは完璧で、事実…私は任務中何度も何度も彼女の機転に助けられている。

それでいて常に私をたてる謙虚な性格で、人間よりも人間らしいのだ。

私はベッドから出て、服をクローゼットから取り出しバスルームへ。寝汗を流すべくシャワーを浴びるためだ。

(…ザアアアア…)

「~~~~~」

鼻唄を歌いながら、寝汗をあまり熱くないシャワーで流す私。
え、何の歌かって？

そこは、皆さんのご想像にお任せしますよ。

(キュッ)

「ふう…」

よし、目が覚めた。

今日は一日中、のんびりと過ごそうかな…」

体についた水滴をタオルで拭って、服を着る。

私はフェイトと同じようになのはやヴィヴィオと同居している。
家事はなのはとフェイトと私の3人で、その日できる人がやる事にしている。

今日は私が当番だったが、なかなか起きてこない私に呆れたか…なのはがすべてやったようだ。

ダイニングのテーブルに、書き置きを見つけた。
…なのはの可愛く丸っこい字で書かれていた。

『アリシアちゃんへ
昨日は本当にお疲れ様。

だけどあんまりお寝坊さんなのはダメだよ？

今日は私、教導関係で遅くなりそうなの。
お買い物とヴィヴィオの事お願いね。
なのは』

「…仕方ないか。
もうこんな時間だし、何か食べてからにしよう…」

高町家は基本、レトルトやインスタント・冷凍食品に頼る事はしない。
い。

もちろん、なのはの方針である事は明白だが。
だから今ここにあるのは、生鮮品が大半な訳で。
…もつとも、朝の残り物がない訳ではないが。

「この世の全ての食材に、感謝を込めて。
…『いただきます』」

何故かは解らないが、私はそう言って食事を始めたのだった。

食事を済ませて、買い物を終えて帰ってきた私。

「…あ、そうだ」

買って来た物をしまつて、ある事に気がついた。

「あの『夢』の結果がどうなったのか調べないと。

…アルティ、通話モードをお願い。

接続先は管理局統合本部の人事局」

『了解です』

そう…今朝見た『夢』の、干渉による結果。

あれは、10年前に…私が関わった事件。

ティアナの心を、間接的に傷つけてしまった事件。

相手こそ違うものの、私と彼は確かにあそこへ行っていたのだから。

「…人事局ですか？

1つ確認したい事があるのですが」

私は相手…人事局の返答を待つ。

「え？

あ、はい…そうですか。

ありがとうございます」

私は、安堵と困惑が微妙に混ざった顔をしていた。

「…そっか…。」

『いる』のか…」

私はその日、様々な思いを巡らせながら眠る事になるのだった…。

翌日。

今の仕事場である『管理局次元航行部』の本部にあるドックに停泊する、XV級次元艦クラウディア。

兄のクロノが艦長を務め、フェイトや彼女の補佐官をしてるシャリオにティアナも乗っている。

そして今日、新しい乗員が来るらしい。

その話を聞いて、ここ数日柄にもなく顔が緩みきったティアナ。

無理もないか…六課の時も『彼』はいなかったし。

それ以降も、まともに会う事はできなかったから。

「ティアナ、いよいよ今日だね。

凄く嬉しそうだよ」

フェイトがティアナに声をかける。

「ええ…もう待ち遠しくて仕方ないですよ」

そう言うティアナの声は、いつもより弾んでいる。

…まあ、わからなくてもないけど…ね。

そんな訳で私とフェイト、ティアナとクロノの4人は艦長執務室で『彼』が来るのを待っている。

来室を告げるブザーが鳴り電子扉が開かれる。

「…失礼します！」

ティード・ランスター三等空佐、辞令により本日付で着任します！
！」

「兄さん、久しぶり！」

そう、ティアナの兄であるティード・ランスター。

彼は、10年前の任務中に職務復帰が危ぶまれる程の重傷を負った。しかし、妹・ティアナへの責任感からか信じられない速さの回復を見せて復帰を果たした。

機動六課には参加していなかったため、今日が久々の兄妹再会となった。

「よ、久しぶり。」

ハラオウン執務官に、迷惑かけてないか？」

そこへすかさずフェイトが答える。

「ティアナ彼女は優秀ですよ…逆に私の方が迷惑かけてるくらいで」

この後は軽く雑談をして、私達は仕事に戻った。

やはりあれは誰かが、私に『過去を、より良い結果に塗り替える』夢を…見せていたのか。

…そんな事ができるのは、多くの宗教にある『神』と呼ばれる超越存在だけ。

…まあ、考えても詮無い事なので忘れよう。

あの兄妹を引き裂く悲劇が起きない事を…今は、切に願うばかりだ。

番外『変わりゆくもの、変わらないもの』（後書き）

―番外の舞台裏―

今回は本編に関係のない、外伝的なものを一部書いてみました。

アリシア「事務所ネタとか英霊融合とか…本当に自重しなかったね。あ、皆さんこんにちわ。

初めましての方もいるかもしれませんが、一応。

私はこの駄目作者が書いた駄作品の主役をしている、アリシア・テスタロッサ・ハラオウンです」

自分で駄作とか言うな。

少なくとも原作のアリシアって、そんな棘のある性格じゃなかったぞ？

アリシア「原作はあくまで原作、私は違うよ。
そもそも

抑：フェイト達と絡ませるために、転生させたんだから違いがあるのは当然でしょ？

それに…私と『フェイトは限りなく近いのであって、同じではない』のは原作の設定だよ？」

む……。

アリシア「ところで、私が前作で暴走させた力の説明って無いの？何か、S O 3の特殊能力のようなものって…あの時は言ってたけど」

…ああ、あれは今回出した具現化の制御に失敗してあんなった結果。
インストール
実は転生時から、君と例の『白百合の騎士姫』の魂は融合している

のさっ☆

アリシア「うわ…今全力で殴りたくなった。

…って事はA S終盤とかのエクスカリバーも？」

そう、君とひとつになった騎士姫様が無意識のうちに編み出すよう仕向けたって訳。

だから君が望みさえすれば常に『白百合の騎士姫』でいられるって訳だね。

ああそれと、彼女は『限りなく本物に近い者』だから格闘ゲームの彼女と同一視しないように。

アリシア「…バルバトスを出したのは？」

御大「そりゃあもちろん『中の人』の関係いゝ。

奈々ちゃんのキャラが戦う事ができてえ、非常に強いインパクトを持った敵役といったらあ、

まず奴以外には、そうそういないでしょおゝう」

アリシア「…え、い…今の『御大』って誰！？

今独特な声が聞こえたんだけど！？」

事務所の先輩に向かって失礼だな君は。

あと、聞きたい事は無いのかい？

アリシア「…あともう1つ聞いていいかな。

前作で私がフェイトの事を恋人として、好きになった理由って？」

それも騎士姫様のせい。

実はこの人、女性だというのに女の子が大好き。

だから白『百合』の騎士姫って異名があるのだよ。

そして、フェイトは彼女の好みのどストライク。

だから、脳内物質分泌とか色々操って…ついには君の素の心すら蝕んで女性しか愛せない体にしてしまったという。

(項垂れるアリシア)

ちなみにあのKYシスコン執務官…いや今は提督か、奴は2人の『関係』を知り激怒するんだけど。

お約束通りに、フェイトの逆鱗に触れて『O☆H A☆N A☆S H I』される事になった訳だ。

アリシア「うわぁ…」

んで、前作エピソードにもあるけど…紆余曲折あって2人は法律的にも認められ恋人となった。

今でもたまに二人で部屋にこもっては、互いの想いを重ねている…という訳。

もちろん2人共もう立派な大人ですので…『水音』も立てたりします。

アリシア「…色んな意味でとんでもないね」

それじゃそろそろお別れの時間となりました。

次は本編にいきますので、もう暫くお待ち下さい。

前夜（前書き）

…やっところさ、書きあがりました…。

前作で書き忘れてましたがアインスは闇の書事件以降C Vがゆかなという設定になっています。

ギアスでC・C・をやっているのでアリかなと。

前夜

「魔法戦闘の大会？」

合宿旅行最終日の朝。

私はヴィヴィオやコロナやリオ、ルーテシアにアインハルトと一緒に朝食を摂りながら談笑していた。

なのは達はメガーヌに協力してもらって、別室で…というよりも私達が外にあるテラスで食事している。

その時、この話題となったのだ。

発言者はリオ。

「そう…あまねく管理世界から腕に覚えのある魔導師達が集い、年に一度その腕を競う本格的な大会。

『D S A インターミドルチャンピオンシップ』。

出場資格は満年齢で10歳から19歳、魔法の資質があれば誰でも出られる公式競技だよ」

私のセリフをルーテシアが繋ぐ。

「参考までに昨年の映像があるけど…見る？」

返事を聞く前にモニターへ記録映像を映す。

15歳前後の少年少女達が己の持ち得る知識と技術の全てを用い、本気で戦っている。

「私達も今年から出場資格があつて…みんなで出ようって話してたんです」

「ちなみに今回は私も出場する！」

コロナの言にルーテシアが続ける。

そこへ、メガーヌが空いた食器を下げに来る。

…へ、何で年上のメガーヌを呼び捨てしてるのか？

それは彼女が望んだ事で、私に対する敬意の表れだというのが彼女の言い分。

特に拒む理由もないので、私は機動六課の解散後からそうしているのだ。

「あら、インターミドルの映像？

懐かしいわね、私も昔はこれに出たっけ。

…クイントと、都市決勝で争ったりもしたわ」

クイントとはスバルの母親だと、ヴィヴィオがアインハルトに補足していた。

そこへ、メガーヌが余計な一言。

「…でも、私なんかよりもっと凄い人がいるわよ…『そこ』にね」

メガーヌは、長テーブルを挟んで反対側にいる人物…私を指差す。

私に集まる視線は、昨日のアインハルトとの模擬戦もあつて驚きと納得が半々となっている。

私は小さい溜め息のあと、自分の『経歴』をみんなに明かし始める。

「…11年前、管理局員になって5年くらいかな。私は力試しのつもりで出場したの。

でも、周りの人達は…私の力を知ってたみたいで」

…私はそこで一旦、言葉を切る。

「…当時12歳だったから結構苦戦もしたけど、世界代表戦まで進んだ。

そして…私はミッド代表として、栄光を掴んだの。

もちろん、12歳での優勝は史上初だから…取材とか後の事が面倒だった。

そっちは本局が何とかしてくれただけど、翌年から強制的に出場させられて…気がついたら7連覇なんて事になってたの。

8年目は六課に参加してたから、それを口実に出場は辞退したけどね。

…『雷光の女帝』『神速の戦女神』っていう通り名、聞いた事ないかな？

あれは、インターミドルで7連覇を達成した後ついた私の異名なの」

私は少しだけ…寂しそうに『経歴』を語り、後輩達に羨望と尊敬の眼差しを向けられていた。

「さ、湿っぽいのはこれでおしまい！

とりあえず今は、みんなのインターミドルの事を優先しなきゃね。

ヴィヴィオとリオとコロナは出場だろうけど、アインハルトはどうするの？」

「…私も、出場してみたいです。

私の力…カイザーファース霸王流が何処まで通じるのか試してみたい。

アリシアさんのような強い人に、少しでも近づきたいですし…」

アインハルトの眼に確かな光が見えた。

「そう、なら出場だね。」

条件はもうひとつあって、安全のためクラス3以上のデバイスを所持・装備すること…なんだけど、アインハルトって確か…」

「…デバイス、持ってないです」

アインハルトの表情が少しだけ曇る。

「そうだったね…。」

この機会に作ろうか」

「え…でも真性ベルカ式のデバイスは作るのが…」

そこヘルーテシアが会話に割り込んでくる。

「ふっふっふ…。」

私達のコネクションを甘く見てもらっちゃー困りますねえー？

そういうのにお誂え向きの人達もいるわよ！

家主以下バリバリの、真性古代ベルカ式の大家族！！

あの人ならピッタリの機体を、きつと製作してくれるわよ？」

その頃、ミッド南部のある家の家主が誰かに呼ばれたような気がしたとかそうでないとか…。

カルナージでの合宿旅行を終えてミッドに帰ってきた私達。

なのはとフェイトは休みも取らず仕事に出たが、私は久しぶりの限

界超えて体がいう事をきかなかった。
そのため無給の休みを1日とった。

私は10年以上の付き合いとなる『親友』にメールで確認をとる。
：どうやら次の日曜に会う事ができるようだ、その時アインハルト
も連れていく事にした。

行き先は、ミッド南部沿岸にある高級住宅地。

あそこの『8姉妹』は本局でも、ちょっとした有名人だ。

日曜。

私はアインハルトを迎えに愛車：地球から持ち込み、ミッド仕様に
改造を施したインテ○ラで待ち合わせの場所に向かう。

：そこ、伏せ字の意味無いとか言わない。

アインハルトを隣に寄せ、高速を使って3時間ほどで目的地に着く。
：え、当然法定速度は順守してシートベルトの着用も怠りませんよ？
管理局の高官が道路交通法違反で捕まりましたなんて洒落にならない
でしょ？

クラナガン南方の沿岸部にある、二階建てで雰囲気の良い大きめの
家。

私達は玄関に立って呼鈴を鳴らしてから、扉を開けて声をかける。

「こんにちわ〜！」

すると、かなり高めの声をした少女の返事。

そして少女3人といずれも豊満な膨らみを持つ女性達4人、家主が出迎えた。

『いらっしゃい！！』

「みんな、久しぶり！
元気そうだね！！」

「ほんま久しぶりやな。

こうして顔会わせるんは…六課解散してすぐ以来やしな…アリシアちゃん」

「そうだね…はやて」

八神はやて。

この家の主で管理局の海上警備部捜査司令。

他の7人ははやて、或いは誰かと相棒のような関係の者達だ。

「それはそうとまた大きくなったんと違うか？

羨ましいわあ…：一遍だけ触らせて、ええやろ…な、な〜？」

『わきわき』と怪しく動くはやての手を、ぴしゃりと払う私。

「…お客さまに失礼な事をするのが、八神家のルールなのかな？」

「痛…相変わらず手厳しいわあ。

で、その子が例の霸王っ子なんか？」

「…うん、アインハルト・ストラトス。

アインハルト、こちら時空管理局の海上警備部・子狸はやて捜査司令」

「えと…初めまして…。

子狸…司令…？」

「ちよ、待てえ!!」

どさくさ紛れにウソ教えんなや!!

アインハルトもちよっとは疑ってや、そんなに簡単に信じられたら凹むわ!!

私の苗字は八神、表札にもそうあったやろ!？」

「主、抑えて下さい!

アインハルトが面食らっていますよ!」

黒のワンピースを着た銀髪美女・アインスがはやてをたしなめる。

八神家・リビング。

簡単に自己紹介を済ませる八神8姉妹。

ちなみに家主であるはやては五女。

八神家は全員が管理局員のため、ちよっとした実業家くらいの収入がある。

この家も、普通なら10年以上かけて完済する金額が必要なのだが…何とたった2年で完済したらしい。

みんなお金のかかる趣味を持ってないからというものもあるが…。

「ほんで、アインハルト…やったか。」

インターミドル出るためにデバイス作るんやって？
機能や形状の希望とかあるかな？」

その問いにはアインハルトではなく、私が答える。

「動きを阻害しないように非装着型がいいと思う。
クリスみたいな、ね」

「格闘家さんやもんね。」

スバルのマツハキヤリバーとか、かなり重いし。

んでな…少し調べてみたんやけど、クラウド殿下って豹を飼ってた
という記録があるらしいな？」

「はい…古代ベルカでは、雪原豹も立派な兵士。

クラウドやオリヴィエも、大事にしていました」

アインハルトは、クラウド殿下直系の末裔ともいえる『記憶』の継
承者。

カイザーアーツの祖であるクラウド殿下の『思い』を受け継ぐ純血
統。

「…じゃあ、豹をベースに作ってみるわ。」

完成したら、連絡をよこすから楽しみにしててな」

暫くして、はやてから私のところに連絡が入った。

『あ、アリシアちゃん？

例のデバイス完成したからアインハルトと一緒に次の休日あたりに来てくれへんかな？』

「…わかった。

じゃあ次の日曜、チンクとノーヴェも連れていくから予定空けてね？」

『了解や！』

アインハルトのデバイス：どんな機体こなんだろうと思いを巡らせる私。

また別の日曜、八神家。

「さて、そんな訳で。

約束のデバイスが完成したんで、お披露目&お渡し会とゆー事で♪」
『わー！！』

はやてのセリフに合わせて拍手するツヴァイ、そして紙吹雪をまくアギト。

アギトはルーテシアの友人でもあり、ツヴァイと同じユニゾンデバイス。

本来なら3〜40？程度の妖精のような姿だが、人間サイズにもなれる。

「…いやー、結構苦労したで？」

サイズもそうやけど造形に関するところとかな。

まあ、その辺は実際に見てもろうた方が早いな。

ユニットベースはツヴァイで、AIの調整が私。
外装デザインは、アギトの手作りや」

「シュトゥラ地方の雪原豹って要望だったけど…割といい感じになったぜ。」

サイズと外見の兼ね合いが結構難儀だったけどな」

「え、動物型？」

「あまり大きいと連れ歩くのが大変では…？」

ノーヴェとチンクが疑問を口にする。

「それは無問題や、モウマンタイツヴァイ！」

「はいですー！」

ツヴァイが、膝の上に乗せられる程度の大きさの箱をアインハルトに渡す。

なるほど、これなら携行の問題は少なそうだ。

箱の蓋をゆっくりと開けるアインハルト。

彼女の愛機となる、動物型デバイスとは…。

『（……………猫？）』

チンクとノーヴェ、アインハルトまで呆気に取られていた。

「いや、ぬいぐるみ外装は遊び心って奴なんやけど…性能は折紙つきやで？」

はやてが、3人の心の声に補足する。

「(もぞもぞ…)」
「…にゃあ♪」

「…あ…」

デバイスが目を覚まして、アインハルトを見た後一声鳴く。
それに対しアインハルトは頬を赤らめる。

「わあ…可愛い！
アインハルトが、この子の『ママ』だね♪」

箱を横から覗き込んだ私は素直な感想を述べ、アインハルトを弄る。

「え…ええっ!？
『ママ』って…冗談やめて下さい!!」

「冗談なんかじゃないよ…『刷り込み』って知ってるかな？」

「知ってます！
知っていますけど…って、アリシアさんっ!!」

ますます顔を真っ赤にするアインハルトが面白くて、つい弄ってしまふ私。

「(はあ…何度見ても凄く可愛い！
本当に羨ましいわ、アインハルト…)」

普段はクールなアインスの顔が何かだらしなく緩んでいるが…スル
ーしよう。

「（ああ：温かい、本当に生きてるみたいだ）」

アインハルトがデバイスに触れ、まるで生物のようなその温かみを実感する。

庭にて『マスター認証』を行うアインハルト。
ベルカ式の魔法陣が地面に浮かんで、私達にも魔力の高まりを感じる。

「デバイス個体名称登録。

『アステイオン』：愛称は『ティオ』。

ベルカ式インテリジェントデバイス。

……アステイオン、セットアップ！」

アインハルトが以前『武装形態』と呼んでいたセットアップ。

バリアジャケットを展開し戦う姿をとる。

髪形がポニーからツインになっている以外はほとんど変化がない。

といっても、ヴィヴィオと同じように大人の体に変身しているのだ
が。

最終調整を経て、ティオはアインハルトのものとなるのだった。

そして、迫る本番。

出場する若き力達は準備に余念がない。

当然ライバル達も然りで、各々本番へ向けての準備を進めていく。

シグナムやザフィーラから指導を受ける少女ミウラ・リナルディ。

聖王教会の問題児、お転婆シスターであるシャンテ・アピニオン。

本人曰く『去年は変な奴に負けた』らしい女子学生、ハリー・トライベッカ。

『雷帝』の血を（多少は）継ぐ少女ヴィクトーリア・ダールグリュン。

そして去年の覇者、ジークリンデ・エレミア。

かつて『神速の戦女神』と呼ばれた私の影を皆が追うべく…今年も、熱き戦いがその幕を開ける。

前夜（後書き）

この後の展開はどうしようかな？

漫画読んでないんで構想が練れません。

いつその事、一般クラスを捏造して進めようか…。

主人公設定（前書き）

今更ですがアリシアの設定です。

前作と食い違ってる箇所は突っ込まないで下さい。

主人公設定

アリシア・テストロッサ・ハラオウン

CV..水樹奈々

出身..ミッドチルダ南部・アルトセイム

現住..ミッドチルダ首都・クラナガン

性齢..23歳・女

身長..170センチ

職業..武装魔導師

所属..次元航行部・XV級航行戦闘艦クラウドディア

役職..常駐戦闘魔導師部隊『ワルキューレ』隊長

階級..航空准将

●魔導師ランク

陸戦..SSS+

空戦..EX+

●局内関連の主な経歴

・新暦63年(7歳)

時空管理局提督リンディ・ハラオウンの推薦により、囑託扱いで採用される。

この当時は記憶障害により『アリス・インテグラ』を名乗っていた。

・新暦64年(8歳)

第4陸士訓練校・短期研修カリキュラム修了に伴い、管理局に正規登用。

当時の階級は二等空士。

・新暦65年(9歳)

ジュエルシード事件発生、この事件に介入。

現地協力者(当時)の高町なのはと共に、事件解決へ奔走。

・同年10月

上級キャリア試験受験。

若年ながら適性十分と判断され、条件付きで合格。

・同年12月

闇の書事件発生。

高町なのはや、フェイト・テストロッサらと共に事件介入。

『闇の書』の所持者である八神はやたとその守護騎士『ヴォルケンリッター』を味方とし、事件を完全終結させる。

・新暦66年(10歳)

ジュエルシード事件と闇の書事件の功績により特進、三等空尉となる。

また八神家の6人を闇の書事件の贖罪として管理局に推薦。

・同年4月

フェイトと共にリンディの養女となり、アリス・I・ハラオウンとなる。

・新暦68年(12歳)

DSAA・インターミドルチャンピオンシップに出場する。

以降7年間連続で出場し、史上初の7連覇を達成。

・新暦70年（15歳）

これまで積み重ねた功績により一等空佐へ昇進。

8年で二士からの11階級昇進は史上最速。

また同時に、魔導師ランク再認定を受ける。

この時は空戦SSS+。

・新暦75年（19歳）

古代遺失物対策室第六機動強行対策課（機動六課）へ転属。

配属は『部隊司令部ロングアーチ・フォワード隊現場司令官』、コールサインは『フォワード00』。

・同年9月

管理局地上本部・機動六課同時襲撃、及び『ゆりかご事件』発生。
フェイトと共に、容疑者である広域次元犯ジェイル・スカリエッティを逮捕。

彼の『娘達』ナンバーズの生存した11名の内7名を説得し更正させる。

・同年10月

失っていた記憶を取り戻しアリシア・テストロッサ・ハラオウンに改名する。

本人の証言によりジュエルシード事件の容疑者であるプレシア・テストロッサの娘であった事が判明。

本局総務部は、これまでの彼女の多大な功績から不問とする事を決定。

・新暦76年（20歳）

機動六課解散に伴い、次元航行部へ復帰。

総務部より准将への昇進を打診されるが辞退。

・新暦78年(22歳)

再三の打診に応じないため総務部は昇進を『辞令』として、航空准将へ強制的に昇進させる。

●所持資格

魔導師部隊上級指揮官

執務官・執務官補

デバイスマイスターB級

通信業務B級

航空戦技教導官

教育隊教官

普通四輪運転者

大型自動二輪運転者

ストライクアーツ皆伝

●特記事項

『姫騎士の鎧』というレアスキルを所持。

元来ミッド式魔導師である彼女が、ベルカ式の適性を持つに至った理由と言われている。

発動すると純白のドレスに銀の甲冑を合わせた清潔なイメージになる。

『闇の書事件』の最終決戦にて初めて使用し、以降は強敵との戦いにおいて必ず発動させるようになる。

彼女につけられた、通称の1つ『白百合の姫騎士』の由来でもある。

●備考・その他

『ゆりかご事件』を経て、戸籍上にしか過ぎなかったフェイト・テスタロッサ・ハラウンと本当の意味で双子となった。姉として、また上司としてフェイトと接する。

フェイトほど子供好き…という訳ではないが、彼女が保護し六課時代は同僚でもあったエリオとキャロには特別に優しい。

機動六課時代保護した少女ヴィヴィオとなのはの養子縁組の際、フェイトと共に法的後見人となる。ヴィヴィオからはなのはやフェイトと同じく、ママと呼ばれ慕われている。

私物の車は元々、幼少期に住んでいた97管理外世界『地球』で実際に売られていたもの。

●所有デバイス

『アルテミシア』

CV…浅野真澄

ミッド式・ベルカ完全適応インテリ型。

7歳の時リンディの誘いで入局する際、本局技術部の協力により製作した。

当時から対AMF戦を想定した設計をしており、魔力無効状況でも安定した力を発揮できる。

また、ミッド式には珍しく近接格闘も可能。

ベルカ式魔力ブースト機構『カートリッジシステム』CVK-792を、初めてミッド式で採用した3機のうちの1機である。

その後も改修を重ね、現在4代目となる。

特筆すべきはそのコミュニケーションの巧さ。

非常に人間臭い反応をする『彼女』に、アリシア自身何度も励まされている。

手甲・長剣・双剣・大剣を使い分ける事ができる。

最初は杖もあったが、形態変更が繁雑になるため今は設計からも外している。

●使用魔法

ブレイクナックル+

手甲形態・ファイティングフォームでのみ使える格闘攻撃スキル。

魔力で拳に帯電させ、敵のガードや防御障壁を突破・破壊する。

対AMF戦を想定しており接触型にする事で、魔力の結合妨害効果をほぼ無効にする。

ちなみに、ファイティングフォームの時はBJが旗包（地球の、特

に日本でいうところのチャイナドレスと言われる衣装)になる。

アークブレイド

フェイトでいう、ハーケンセイバーに相当する中距離攻撃魔法。
帯電した剣圧を単発で発射する。

フォトンシューター

フェイトでいう、プラズマランサーにあたる中長距離射撃魔法。
単発から連射まで、幅広い運用が可能。
256発の魔力弾が一斉に襲いかかる『フランクスシフト』がある。

最大で4096発という、圧倒的物量で文字通り殲滅する『デストロイシフト』もある。

ライトニングブレイカー+

スターライトブレイカーに電撃を付加した、砲撃系で最強の魔法。
なのはのブレイカーと衝突しても、余裕で押し返せる威力。

もちろん結界機能完全破壊効果は標準装備。

威力SSS+、詠唱速度はAAA+。

その超絶的な威力から別名『冥王攻撃』とも言われている。

エクスカリバー

『約束された勝利の剣』の別名を持つ。

『姫騎士の鎧』によって、使えるようになった斬撃型砲撃魔法。

デバースフォームに魔力を込めて、振りかぶってから大きく振る事で巨大な光の帯をぶつける。

『姫騎士の鎧』を発動せずとも使えるが、威力低下は否めない。

アヴァロン

『全て遠き理想郷』という別名を持つ。

『姫騎士の鎧』発動中は、常時展開している防御用の魔法。

絶大な対傷自然治癒能力：いわゆる再生能力と、絶対的な回避能力を可能にする補助スキル。

タクティカルバインド

戦う相手の動きを止める、一般的な補助魔法。

メタモルフォーゼ

(フェイクシルエツト)

通常は魔力によって相手の視覚に干渉する魔法。

アリシアの場合は、魔力で体型などの見た目と声帯を変化させる。

違法組織の内偵などもする彼女は、この魔法で別人に成り済ましてから任務へとあたる。

変身できるのは『肉体年齢15〜35歳の女性かつ、身長差が5センチ以内』である。

声帯模写は、女性であればあらゆる声が可能。

主人公設定（後書き）

場合によっては変わる事があります。

それにしても、本当チートだな…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7076t/>

リリカルなのは-Twin Lightning- ViVid

2011年8月15日22時48分発行